

# ぼうしいっぱいのさくらんぼ

(文：花岡大学 絵：平成 21 年度大淀町会生涯学習講座「ちぎりえ」受講生)

ひろしは朝ねぼうだ。起こしてもなかなか起きない。

「うん、起きるよ。」

と言って起きない。お母さんは、いんきょのおじいさんに相談した。

おじいさんは、

「よし、わしにまかすとけ。」

と言うた。





明くる朝、電話のベルが鳴った。

ひろしは、その音で目を覚ました。

じゃんじゃん鳴る。

お母さんはるすらしい。

しかたなしにひろしが出た。

「もしもし、どなたですか。」

「やあ、ひろしか。いんきょのおじいだ。おはよう。もう起きたのか。えらい、えらい。朝は早く起きるのにかぎる。きれいな朝の空気をうんとすって、ぐんぐん大きくなれよ。はい、さよなら。」

あっという間に、電話は切れた。



(なんだ、用もないのに電話をかけてきて、いじわるじいさんめ。)

そうは思ったが、べつにはらを立てているわけではない。

それに、えらい、えらいとほめられたので、今さらねるわけにはいかない。

まどを開けた。

さっと朝の風がふきこんできた。

うら山の緑の葉っぱが、ちかちか光って目にしみる。



「いいな、朝早く起きるのは……。」  
すると、まどの下で声がある。  
あきおとごろうだ。あきおがごろうに言う。  
「とってもおいしそうなきくらんぼが、いっぱいになっている  
木を見つけてあるんだ。  
すぐそこのがけの上だがいっしょにいかないか。」  
「へえ、すごいな。行こ。ひろし君もさそつてやろうよ。」



「だめだよ。あいつはねぼうだから、まだぐうぐうねてるよ。」

「じゃ、起きるまで、待ってやろうよ。」

「だめ、だめ。さくらんぼは、朝つゆに冷えているのを食べるのがいちばんおいしいのだ。ほっといて行こう。」

「そんなら行こう。」

ひろしは、あわててまどから首を出し、「ぼくも行くよ、待ってくれ。」とさげんだ。

「あれ、もう起きているのか。」

「あたりまえだ。ぼく、ねぼうじゃないよ。」





なるほど、これはすごい。

がけの上の大きなさくらんぼの木の葉っぱの間に、真っ赤に  
うれたさくらんぼがいっぱいついている。

三人は急いで木の上によじ登り、思い思いにえだにこしを下  
ろすと、ものも言わずに取って食べた。

あきおの言うとおりに、こんなおいしいのを食べたことがない。

「うまいね。」

「うん、うまい。」

それだけしかものがいえない。



あきおもごろうも、むさぼるように食っている。

ただ、いちばん上のえだにいるひろしだけは、さっきから食べるのをやめて、ぼうしをぬいで、その中へ取っては入れ、取っては入れしている。



あきおはふしぎに思ってきいた。

「ひろし君、どうして食べないで、そんなことしているの。」

「これかい。」

と、ひろしはにこにこしながら答えた。

「あんまりおいしいので、いんきょのいじわるじいさんに、  
持って行ってやるのさ。」

「いじわるじいさんに？」

「うん、お礼のしるしにね。」

「お礼のしるしに？」